

1973年に有吉佐和子の同名小説『恍惚の人』を原作に制作された作品。

老人性痴呆症という当時としては耳なじみのないテーマをいち早く取り上げ、話題になった作品だが、本作のすばらしさは、主演の森繁久彌・高峰秀子の名演、松山善三の脚本により、重いテーマにもかかわらず、娯楽性のある作品に仕上がっていることだろう。

84歳の立花茂造（森繁久彌）は、老妻が死んで以来、実の娘の京子（乙羽信子）や息子の信利（田村高廣）の顔さえ見忘れ、覚えているのは、信利の妻 昭子（高峰秀子）の顔のみ。

「お義父さんには何もしてもらったことがないのに…」と愚痴をこぼしながらも介護を続ける昭子。しかし、便所に閉じ籠ってしまったり、畳一面に排泄物をこすりつけたりと奇行は増加する一方で……。

痴呆と介護という古くて新しい問題を真正面に据えつつも、その問題を主題にするのではなく、介護を通じて生まれる、嫁と舅の心のふれあいを、切なく、おかしく、感動的に描いた人間ドラマ。

見終わったあと思わず「ええ映画やったなあ……」と言ってしまう作品です。

（別の解説）

『恍惚の人』（こうこつのひと）は、有吉佐和子の長編小説。英語名は「The Twilight Years」。1972年に新潮社から「純文学書き下ろし特別作品」として出版され、1973年には森繁久彌主演で映画化された。たびたび舞台化されており、1990年には日本テレビで、1999年にはテレビ東京で、2006年10月には三國連太郎主演でテレビドラマが放映された。

本作は認知症（認知症および老年学）をいち早く扱った文学作品である。1972年の年間売り上げ1位の[1]194万部のベストセラーとなり[2]、これがきっかけで痴呆・高齢者の介護問題にスポットが当てられることになった。その関心度の高さから「恍惚の人」は当時の流行語にもなった。題は『日本外史』に三好長慶が「老いて病み恍惚として人を知らず」とあるのを見てひらめいたものである。

井上ひさしによればこの作品のために有吉は10年近く取材をかさねた。

本作の収益で1974年に建てたとされる出版元の新潮社の別館ビルは「恍惚ビル」と呼ばれた。

主要キャスト

- | | |
|-----------|--|
| 立花茂造・森繁久彌 | 昭子の舅。昭子を何かといじめていたが、妻が急死した後に認知症が進んでいることが家族に分かり、一転昭子に頼りきりの生活になる。 |
| 立花昭子・高峰秀子 | 立花家の嫁。弁護士事務所で働き、家事をこなしながら舅の介護に忙殺される。 |
| 立花信利・田村高廣 | 昭子の夫。商社に勤め多忙を極める上、認知症の進行する父の状態が自分の未来に重なって見えるためやりきれず、最後まで介護には関わらない。 |
| 立花敏・市川泉 | 信利・昭子夫婦の一人息子。大学受験勉強中だが、敬老会館への送り迎えもし、茂造が徘徊して行方不明になったときには探しに行くなど、介護にはわりと協力的。 |
| エミ・篠ヒロコ | 大学生。恋人の山岸と共に、昼間茂造の面倒を見る条件で離れを借りる。茂造の病状が進んで手がかからなくなっていたため、茂造には比較的好意を持つ。 |
| 京子・乙羽信子 | 茂造の娘。自分のことを娘ともわからぬ茂造の看護には消極的。 |